

編集後記

総合情報センターは、平成 28 年度 4 月に情報戦略部門・教育デザイン部門・教育システム部門・ネットワークシステム部門・情報セキュリティ部門・ユーザーサービス部門の計 6 部門を設置し、センター内部で部門ごとに整理した業務を着実に実行して参りました。平成 29 年度の目玉事業は、情報基盤リプレイス 3 案件（教育システム、ネットワークシステム、キャンパス間回線）です。平成 29 年 10 月にネットワークシステムおよびキャンパス間回線、平成 30 年 3 月にコンピュータシステムとそれぞれ新しいシステムが稼働を開始しました。基幹のスイッチやサーバ群を外部の堅牢なデータセンターに集約したことによって、情報基盤リプレイス 3 案件共通のコンセプトである「BCP 対策の強化」、「全学的なプライベートクラウド推進」、「セキュリティの強化」、「運用管理業務のアウトソーシング」に沿った情報基盤が実現されたものと考えています。また、これらは技術的な観点からのアプローチですが、情報サービスを利用するユーザの観点から考えたサービスの質向上を目指した取り組みも数多く行われていることが本年報を通してご確認いただけたのではないかと思います。

さて、話は変わりますが、私は、平成 30 年 9 月 3 日（月）～9 月 7 日（金）にかけて北海道札幌市において開催されたとある学会の全国大会に参加していました。大会期間中の平成 30 年 9 月 6 日 3:00 ごろ、北海道胆振東部地震に遭遇しました。本震の発生当初から、札幌市全域に渡って停電になりましたが、私の周辺の無線基地局等は予備バッテリー等のおかげによりしばらく稼働を続けており、電話回線およびインターネットには接続できました。そのおかげで同学会に参加していた香川大学の同僚と合流することができ、一人で途方にくれることなく、チームで札幌市役所、北海道大学、北海道庁などサービスを継続提供している場所を渡り歩き、落ち着いて今後の方針を検討することができました。つくづく仲間の存在に感謝するとともに、それを繋いでくれた情報基盤や情報サービスにも感謝しました。

被災したことは大変な経験でありましたが、多くを考えさせられました。気づきの一つは情報基盤の堅牢性は実際に救いになるということでした。日常を日常のままに維持し続けることの重要性を体験したものでした。もう一つは、情報を統合的に管理し被災者の必要に応じてアダプティブに情報を届ける情報サービス設計の重要性でした。避難所以外の食料提供など支援の状況や、北海道電力による復旧の状況など、リアルタイムな現状把握と、将来予測の情報が（これは現地では得ることができませんでしたが、）を得ることができれば、さらなる安心につながることを体感しました。

総合情報センターは、今後ますます情報基盤の堅牢性を高め、災害や事故に対しサービスを維持できる体制づくりに努めてまいります。私は、それに加え、全学の情報を統合管理していくことがより良いサービスに不可欠であるという認識を改めて持った次第です。いずれの部門報告においてもアクセスログ解析やアンケート等、データによる現状把握が挙げられていますが、今後もこれらデータを上手に活用した情報サービスの展開を議論していければ嬉しく思います。

最後に、本年報をまとめるにあたり関係各位に謝意を表したいと思います。

ユーザーサービス部門 部門長 米谷雄介

